

【資料】

大学キャンパス内での心理実験・調査実施の現状
(2005 - 2006年)
研究の倫理的視点からの予備的報告

丹治 哲雄*・櫻井 麻菜**・成澤 由希***

**State of University On-Campus Psychological Experimentation
and Surveys (2005–2006):
Preliminary Report of Research from an Ethical Standpoint**

Tetsuo TAJIMI, Mana SAKURAI, Yuki NARISAWA

To date, undergraduate students, graduate students, and instructors have conducted considerable psychological research on the Koshigaya campus of Bunkyo University by using psychological experimentation, questionnaire surveys, and other means, with mainly undergraduate and graduate students as their participants. Have these researches been conducted in accordance with ethical standards? A preliminary study of the current state of psychological experimentation and surveys carried out on the university campus was conducted on 68 undergraduate and graduate students who had participated in such researches. The study found that although these undergraduate and graduate students were willing to cooperate with such researches, there were several cases in which the experience had been unpleasant. In this study, the authors identify the problems in conducting on-campus researches in universities from the perspective of the research participants.

key words : psychological research , student participants , unpleasant experience , ethical standards of the research ,

心理学研究、学生参加者、不快体験、研究の倫理基準

1 . 問題の所在

文教大学越谷キャンパスでは、これまでに
学生・大学院生（以下「院生」と略記）・教

員らが実施者となり、学生たちを対象とした
膨大な数の心理実験研究や質問紙調査研究が
行われてきた。こうした研究は、教員自身の
研究として行われるものや、実験・演習・卒
業研究などの学部の授業関係で学部学生が行
うもの、また大学院での演習や修士論文作成
のために院生が行う場合もあり、その実施目
的や実施状況は多様である。心理学関係の実

* たじみ てつお 文教大学人間科学部人間科学科
** さくらい まな 文教大学大学院人間科学研究科
修士課程
*** なりさわ ゆき 文教大学大学院人間科学研究科
修士課程

験や調査などの研究を実施する場合、研究の倫理基準を遵守しながらそれを実施しなければならない。我が国の幾つかの心理学会や心理職能団体では、研究者を含め心理学に携わる者に向けられた倫理綱領・倫理基準を作成公表し、また啓蒙活動等を行っている（例えば、日本心理学会，1996^(文献1)；日本心理学会，1997⁽⁶⁾；日本発達心理学会，2000⁽⁴⁾；日本認定心理士会，2002⁽⁵⁾；日本心理学会，2003⁽³⁾；日本パーソナリティ心理学会，2005⁽²⁾など。その他）。こうした研究の倫理基準は、当然のことながら、学内で研究を実施する学生・院生にも適用される。では、現在までに大学キャンパスで実施されてきた膨大な数の心理実験研究・調査研究は、研究を進める上で守るべき倫理基準に沿って実施されてきたのであろうか。

最近、心理学研究の倫理に関する調査が行われ、その結果が報告されている（杉森・安藤・安藤・青柳・黒沢・木島・松岡・小堀，2004⁽⁷⁾）。ただ、その調査研究は、心理学系の学生・院生・研究者の「研究をする側」を対象に行われており、「研究される側」「研究対象となる側」からの調査研究ではない。幾つかの心理学会・心理職能団体で提起されている研究の倫理基準は、あくまでも「研究をする側」からの提起であると言えよう。では、「研究をする側」ではなく、心理実験・調査への協力要請に応じて参加し「研究される側」の学生・院生たちは、こうした心理学研究への参加体験をどのように捉えているのであろうか。

筆者らは、「研究される側」からの視点に立って、2005年12月から文教大学越谷キャンパス内での心理実験・調査実施の現状についての調査を開始している。現在も調査を継続中であり、現段階では蓄積されたデータは必ずしも十分な量ではないが、今回は2005年後半から2006年前半の期間に回答された結果の一部について予備的な報告を行う。

今回の報告では、(1)越谷キャンパスの学生・院生たちの実験・調査への参加協力等の

実態、(2)学生・院生たちの調査・実験への参加協力・非協力の理由、(3)調査・実験参加協力場面で感じた不快だった体験等、について単純集計結果の一部を報告する。また最後に(4)回答者から寄せられた本調査に関する意見・自由記述の幾つかを紹介してみたい。

この調査研究の最終目的は、大学キャンパス内で学生・院生を対象に行われる心理実験や調査が、どのように協力依頼がなされ、どのように実験や調査が実施されるのが「研究される側」の研究参加者にとって最も望ましい形態なのかを探るところにある。

2. 調査方法

2-1. 調査票の構成

本調査に用いた調査票は、「学内での調査・実験協力に関するアンケート」と題する質問票である。本調査票は、(1)フェイス・シート、(2)回答者の所属学部・学年・性別・年齢・回答年月日等の記入欄（氏名は無記名）(3)これまでの学内での調査・実験への参加協力実態（参加協力を要請された回数・要請者・要請場所・参加協力した理由・所要時間など）に関する質問項目群9問（全64選択肢）(4)調査・実験への参加協力場面で不快体験に関する質問項目1問（全39選択肢）(5)本調査結果の公表許諾に関する質問項目1問（2肢選択）(6)本調査への回答が回答者の自由意志だったかどうかを確認する質問項目1問（2肢選択）(7)自由記述欄、からなる。全9ページの質問票である。

本質問票の作成にあたって、まず筆者ら3名がこれまでの自らの体験や周囲の学生・院生たちからの聞き取りをもとに具体的な事例を挙げ、それを質問項目・選択肢に起こし予備調査票を作成した。次に予備調査票を文教大学人間科学部（以下「人科」と略記）の心理学コース学生3～4年生22名（3年生11名・4年生11名）に配布し、質問票構成上のチェックを依頼した。彼らから指摘された幾つかの

表1．回答者の性別・所属・学年・人数など

	教育学部		人間科学部		文学部		大学院生		研究生		小計
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
1年生	0名	1	1	1	0	0	1	6	1	1	12
2年生	0	0	2	8	2	0	0	0	-	-	12
3年生	0	0	11	20	1	0	-	-	-	-	32
4年生	0	0	6	6	0	0	-	-	-	-	12
小計	0	1	20	35	3	0	1	6	1	1	68
計	1		55		3		7		2		68

表2．調査・実験参加協力への依頼回数

依頼回数	人数	%
1-10回	7名	10.2%
11-20回	1	1.5
21-30回	1	1.5
31-40回	1	1.5
たくさん頼まれた ので覚えていない	58	85.3
合計	68	100.0

この調査は現在も継続中であり、現段階での回答者数は十分なものではなく、また、回答者の属性等も必ずしも均等ではない。今回報告の対象となった回答者は、人科学生が多数(80.9%)を占め、また、学年では研究生・院生を含め学部3年生以上が多数(77.9%)を占める結果になっている。こうした今回の回答者の属性の偏りは、今回報告の結果に少なからず影響を及ぼしている可能性があり、そのことはあらかじめ記しておきたい。

問題点を修正した上で、本調査票を完成させた。本調査票は、回答に約10分から15分間の時間を要する調査票となった。

2-2．実施方法と調査期間

調査にあたっては、筆者ら3名が任意に学生・院生・研究生に直接回答を依頼し、その場で回答済み調査票を回収するか、回答後、研究室前の回収ボックスへの投函を依頼した。本調査は、2005年12月から2006年7月の期間に行われた。

2-3．回答者とその属性

回答者は文教大学越谷キャンパスの学生・院生・研究生68名(男子=25名/女子=43名)であり、平均年齢は21.6歳(標準偏差=2.2歳:範囲=18~32歳)であった。回答者の性別・所属・学年・人数などの属性一覧を表1に示した。

3．調査結果および考察

3-1．調査・実験への協力等の実態

(1) 調査・実験参加協力への依頼を受けた回数結果

表2に、質問「今までに何回くらい...調査・実験へ参加・協力をたのまれたことがありますか?」に対する回答人数の分布を示す。

回答者の多数(85.3%)が「たくさん頼まれたので覚えていない」と回答しており、本キャンパス内では、学生・院生たちへの調査・実験への参加・協力依頼要請は、かなり頻繁に行われていることがわかる。ただ、こうした結果は回答者の多くが人科学生であり、また研究生・院生を含め学部3年生以上の学生たちが多かったことも影響した結果なのであろう。

(2) 調査・実験への参加協力結果

表3に、質問「...頼まれた調査・実験へ参加・協力をした経験がありますか？」に対する回答結果を示す。

表3から、約40%弱の回答者が「ほとんど全ての依頼に参加・協力をした」と回答しており、学生・院生たちは調査・実験への参加協力要請に対して比較的協力的な態度でそれに臨んでいることが示された。

(3) 参加・協力の所要時間結果

表4に、質問「参加・協力の際におよそどのくらいの時間がかかりましたか？」に対する回答結果を示す。

表4をみると、調査・実験へ参加協力した学生・院生たちは、実験では平均で約30分間程度、調査では平均で約10分間程度の自分の時間を実施者に提供していることがわかる。しかし実験・調査ともに最大で1時間程度の時間がかかる場合があったこと

も示された。

3-2. 調査・実験参加協力・非協力の理由

では、次に学生・院生たちは、どのような理由で調査・実験への参加協力の要請に対して、協力したり協力しなかったりするのだろうか。以下にその理由を見ていくことにしたい。

(1) 調査・実験参加協力の理由

表5に、質問「どんな理由から参加・協力をしたのですか？」に対する回答結果を示す。こちらで設定した18項目の参加協力理由の中で、回答者の50%以上がチェックした上位8項目を示す。

回答者の多数(92.6%)が「時間的余裕があったから」を参加協力した理由に挙げており、彼らは時間的余裕さえあれば、調査・実験参加に対して協力的な態度を示してきたことが明らかになった。また、次に上位だった

表3. 調査・実験参加協力の体験について

(1) ほとんど全ての依頼に参加・協力をした	39.7% (27名)
(2) 参加・協力する場合もあったし、しない場合もあった	60.3 (41)
合計	100.0 (68)

表4. 調査・実験参加の所要時間(単位=分)

	回答人数	平均時間	標準偏差	最大値	最小値
実験の場合	55名	30.5	14.7	60.0	10.0
質問紙回答の場合	66	10.5	7.2	60.0	2.0

表5. 調査・実験参加協力の理由・複数回答(実数)

: 比率の分母は68名

(3) 参加・協力する時間的余裕があったから	92.6% (63名)
(9) 自分も調査や実験を依頼する立場だから(立場になるから)	77.9 (53)
(5) 依頼者が知り合いだったから	73.5 (50)
(6) 依頼者が親しい友人だったから	63.2 (43)
(7) 依頼者が教員だったから	58.8 (40)
(1) 調査・実験の内容に興味関心があったから	57.4 (39)
(14) 調査や実験への参加・協力が授業の一環だったから	57.4 (39)
(4) 依頼者が先輩だったから	54.4 (37)

表6. 調査・実験不参加の理由・複数回答(実人数)
: 比率の分母は41名

(1) 参加・協力する時間的余裕がなかったから	87.8% (36名)
(2) 調査・実験の内容に興味関心がなかったから	41.5 (17)
(7) 依頼者とそれほど親しくなかったから	36.6 (15)
(17) 以前にも同じような調査・実験に参加・協力したことがあったから	36.6 (15)
(8) 依頼者が依頼する時の態度が良くなかったから	19.5 (8)
(12) その調査・実験の結果に何の関心もなかったから	19.5 (8)
(13) 参加すると著しいストレスを感じそうであったから	19.5 (8)

「自分も調査や実験を依頼する立場だから(立場になるから)」という理由は、回答者の多数が人科学生だったことを考えると、極めて健全な参加協力理由であると言えるであろう。また、「誰から調査・実験への参加協力を要請されたのか」という点も比較的大きな参加協力の要因になっていることも明らかになった。

(2) 調査・実験への不参加・非協力の理由

次に、表6に質問「どんな理由から参加・協力をしなかったのですか？」に対する回答結果を示す。この集計結果は、質問「...頼まれた調査・実験へ参加・協力をした経験がありますか？」に対して、「参加・協力する場合もあったし、しない場合もあった」と回答した41名が母数になっている。こちらで設定した18項目の不参加理由項目の中で、41名の回答者の10%以上がチェックした上位6項目を選択率の高かった順に示す。

この場合も、最も選択率が高かった不参加理由は「時間的余裕がなかったから」であり、時間的余裕さえあれば、彼らは調査・実験に対して協力する姿勢がある可能性が示された。次いで研究内容に対しての「関心の無さ」、また、「依頼者との関係」などが挙げられた。ただ、1位の不参加理由(「時間的余裕がなかったから」)の選択率の高さにくらべ、それ以下の選択率は比較的低くなっていた。

3-3. 調査・実験に協力して不快だった体験結果

(1) 経験率からみた調査・実験参加協力時の不快体験

次に、表7に質問「あなたが今まで調査・実験に参加した中での体験、あるいは、その時の不快になった気持ち・印象などを教えてください」に対する選択肢の選択率結果を示す。表7ではこちらで設定した39項目の「不快体験」に80%以上の回答者がチェックした項目を経験率の高かった順に掲載した。

表7から、多くの学生・院生たちが実験・調査への参加協力の際に感じた不快体験をまとめてみると、「調査票が、長く・見づらく・わかりにくく・答えにくく・完成度が低い」といった回答を求められた質問票それ自体が抱える問題点から生じる不快感、また、「授業とは無関係の調査票が授業時に渡された」、「...授業中に回答をしなければいけない感じがして授業が無駄になる気がした」といった授業時間を利用した授業とは無関係の質問票への回答依頼からくる不快感、さらに「授業中に先生からゼミの卒論調査に協力して欲しいといわれて...」、「...教員や上級生から頼まれたので断りにくかった」といった依頼者と協力者の関係が二重の関係の時に生じる不快感、さらに、「...実施する側は協力者の負担を考えていない...」といった協力者に対する配慮の欠如からもたらされる不快感、などに集約することができるのであろう。こうした不快体験を、実験・調査に参加協力し

表7. 調査・実験参加協力時の不快体験（経験率）

項目番号	不快体験項目	経験率（実人数）
(14)	実験・調査票が長かった。	97.1% (66名)
(5)	授業とは無関係の調査票が授業時に渡された。	95.6 (65)
(8)	授業中に先生からゼミの卒論調査に協力して欲しいといわれて、調査票に協力した。	95.6 (65)
(1)	調査票に自分の名前や年齢を書かなければいけなかった。	92.6 (63)
(2)	調査票が細かくて見にくかった。	92.6 (63)
(3)	調査票を授業中に回答をしなければいけない感じがして授業が無駄になる気がした。	91.2 (62)
(4)	調査票を一回に何冊もやった。	88.2 (60)
(22)	実験・調査でされた質問の意味自体がわかりづらいことがあり困った。	88.2 (60)
(25)	実験・調査で覚えていないことを質問されて答えにくかった（幼少期の出来事についてなど）。	83.8 (57)
(27)	実験・調査票の完成度が低く、答えにくかった。	83.8 (57)
(23)	実験・質問票を実施する側は協力者の負担を考えていないように思えた。	82.4 (56)
(31)	実験・調査を教員や上級生から頼まれたので断りにくかった。	80.9 (55)

表8. 調査・実験参加協力時の不快体験（平均評定値）

項目番号	不快体験項目	平均評定値(標準偏差)	人数
(27)	実験・調査票の完成度が低く、答えにくかった。	4.09 (0.82)	57名
(19)	実験・調査が自分の忙しいときに行われた。	4.07 (0.94)	43
(14)	実験・調査票が長かった。	4.06 (0.94)	66
(22)	実験・調査でされた質問の意味自体がわかりづらいことがあり困った。	4.00 (0.88)	60
(4)	調査票を一回に何冊もやった。	3.95 (1.14)	60
(2)	調査票が細かくて見にくかった。	3.92 (1.04)	63
(20)	実験・調査が自由参加ではなく強制的な感じだった。	3.84 (1.05)	49
(11)	実験に参加したことで身体的な損傷を受けてしまった。	3.67 (1.51)	6
(36)	その実験・調査が終わった段階で詳しい説明を求めたけれども詳しい説明をしてくれなかった。	3.60 (1.07)	10

た多くの学生たちが多かれ少なかれ有していることがこの結果から明らかになった。

(2) 不快評定値からみた調査・実験参加協力時の不快体験

表8には、調査・実験参加協力時の不快体験について、それが不快だった程度を示した。表8は、不快だった程度の5段階評定（1=全く不快ではなかった：3=どちらでもない：5=全く不快だった）で、平均評定値が3.5以上だった9項目を示している。項目は

平均評定値が高かった（不快だった）順に並べて示した。

表8の結果から、「自分が忙しい時に、完成度が低く（判りづらく答えにくい）、項目の多い調査票を何冊もわたされ、強制的な感じで回答を求められ、回答後も詳しい説明が無い」、こうした事態を実験・調査に参加協力した学生・院生たちは、かなり不快な体験だったと感じていることが明らかになった。また、6名の回答者が「(11) 実験に参加した

ことで身体的な損傷を受けてしまった」という項目を挙げていたが、これは看過できない大変深刻な報告と捉えるべきであろう。

3-4. 自由記述欄から

本質問票最後の自由記述欄(質問「この調査に関して何かご意見があればお書きください」)には、15名(15名/68名=22.06%)の回答者たちから幾つかの意見が寄せられた。その一部を紹介する。

まず、「研究ががんばって下さい」といったこの調査実施に対する激励が6件、次に、「私も学内で調査などをする立場なので、このような調査はとても興味深いです。...」(人科心理3年)、「この調査はとても大切なことだと思いました。実験調査がどのように行われているのかを知ることは大切だと思いました。...」(人科心理4年)、「...この調査の結果と、それがどう有効活用されるか期待しています」(人科心理3年)、「とても考えさせられる質問紙でした。...」(人科心理4年)、「興味深い調査だと思います。...こういった調査の結果が調査のやり方の改善につながると思います」(大学院臨床心理修士2年)といった本調査それ自体への関心や比較的好意的な評価が5件寄せられた。

また、「設問が少し読みづらいです」(人科心理2年)、「項目がよくわからないところがあったので検討してもらえるとありがたいです」(大学院臨床心理修士1年)、「基本的にやりにくい質問紙でした。...わかりやすく(フォーマットを含め)した方がいいと思います」(大学院臨床心理修士1年)といったこの調査で使用した質問票それ自体の問題点に関する指摘が3件あった。

その他、回答者が参加協力したこれまでの実験・調査で感じた具体的な問題点の指摘が4件、不快体験の具体例が2件寄せられた。

また、次のような記述もあった。「自らの経験をもとに書いていますが、学部での調査・実験の協力者募集の実態は、あまり良いとはいえません。そしてそれは、この文教の

キャンパスが、学部生・院生あるいは教員にとって大事な、限りある研究のフィールドであるという認識の少なさから来ているように思えます。調査者に限らず、調査を許可する教員、質問紙や依頼状を受け取る協力者との間で、『現在調査が行われている』という認識が持たれなければ、協力者のコンプライアンスは得られないと思います」。これは大学院臨床心理修士2年の回答者から寄せられた意見である。

4. 論議

今回の予備的報告で対象になった回答者人数の少なさや、また、回答者の学部・学年などの属性の偏りなどの問題点があったとしても、本調査結果によると、本キャンパスの学生・院生たちは、学内で頻繁に要請される実験や調査への参加協力要請に対して、極めて協力的な態度でそれに臨んできていることが示された。約40%弱の回答者は「ほとんどすべての依頼に参加・協力」をしており、また、不参加の理由も「時間的余裕がなかったこと」を挙げる回答者が最も多かった。このことは、参加要請時に「時間的余裕」さえあれば、さらに多くの学生・院生たちが実験や調査に参加協力したであろうことを意味している。また、多くの回答者が「自分も調査や実験を依頼する立場だから(立場になるから)」を参加協力理由に挙げており、実験や調査の実施に関しては、彼らは極めて健全な行動規範を備えている学生たちであると言うことができよう。とはいえ、こうした協力的な学生たちであっても、実験や調査への参加協力に際して、多くの学生が様々な不快な経験をしていることもまた明らかになった。

不快体験の経験率が高く、また、不快評定値も比較的高かった項目を挙げてみると、「(14) 実験・調査票が長かった(経験率=97.1%:不快評定値=4.06)」、「(2) 調査票が細かくて見にくかった(経験率=92.6%:不快評定値=3.92)」、「(4) 調査票を一回に何

冊もやった（経験率=88.2%：不快評定値=3.95）」、「(22) 実験・調査でされた質問の意味自体がわかりづらいことがあり困った（経験率=88.2%：不快評定値=4.00）」、「(27) 実験・調査票の完成度が低く、答えにくかった（経験率=83.8%：不快評定値=4.09）」などの項目であった。それらは、回答を求められた質問票の完成度の低さや、その実施方法に伴う負担によってもたらされる不快感であると言える。不快評定値の高さからみると、「自分が忙しい時に、完成度が低く（判りづらく答えにくい）項目の多い調査票を何冊もわたされ、強制的な感じで回答を求められ、回答後も詳しい説明が無い」といった体験は、彼らにとってかなり不快な体験であったことも示された。「研究をする側」としては、こうした「研究される側」からの不快体験の指摘を謙虚に受け止め、実験や調査の実施にあたっては十分な配慮を必要があろう。彼らの指摘する不快体験は、実験や調査実施の前段階での指導教員による入念な質問票のチェック等の具体的な指導や、参加協力要請時や実施時の協力者に対するきめ細かな配慮によって、かなりの部分が回避できる内容であろうと思われる。この調査で使用した調査票も3名の回答者から問題点の指摘があった。実験や調査を実施し、それを指導する側としては、さらに十分な配慮をすべきであったという反省は自戒を込めて記しておきたい。また「(11) 実験に参加したことで身体的な損傷を受けてしまった」という報告(6名)は予想外の看過できない報告であった。今回の質問票からだけでは、その具体的な身体的損傷の内容やその程度についての詳細は不明である。体験した人数は比較的少数(6名/68名)とはいえ、こうしたことは研究を進めていく上であってはならないことであり、このような事態の防止のためにも、その内容の明確化と防止のための対応が必要であらう。

本報告は予備的な報告であり、調査は現在も継続中である。可能なら経年的にこうした調査を実施し、文教大学越谷キャンパス内で行われる心理実験や調査が研究参加者たちに不快感を与えていないかどうか、倫理基準に沿って行われているのかどうかを継続的に点検し続ける必要がある。そうした作業を通じて、大学キャンパス内で学生・院生を対象に行われる心理実験研究や調査研究が、どのように対象者に協力依頼がなされ、どのように実験や調査が実施されるのが「研究される側」にとって最も望ましい形態なのかを探っていきたいと考えている。

5. 参考文献

- (1) アメリカ心理学会(編) 富田正利・深澤道子(訳) 小嶋祥三・大塚英明(校閲) 1996 サイコジストのための倫理綱領および行動規範 社団法人日本心理学会(Ethical principles of psychologists and code of conduct.1992.American Psychologists, 47, 1597-1611.)
- (2) 安藤寿康・安藤典明(編) 2005 事例に学ぶ心理学者のための研究倫理 ナカニシヤ出版
- (3) 長嶋紀一 2003 日本心理学会における倫理問題の取り組み 心理学ワールド, 22, 5-8.
- (4) 日本発達心理学会(監) 古澤頼雄・斎藤こずゑ・都築学(編) 2000 心理学・倫理ガイドブック:リサーチと臨床 有斐閣
- (5) 日本認定心理士会(編) 2002 社団法人日本心理学会「認定心理士」倫理綱領 日本認定心理士会ニューズレター創刊号 日本認定心理士会
- (6) 日本心理学会 1997 社団法人日本心理学会倫理綱領, 心理学研究, 68, 223.
- (7) 杉森伸吉・安藤寿康・安藤典明・青柳肇・黒沢香・木島伸彦・松岡陽子・小堀修 2004 心理学研究者の倫理観:心理学研究者と学部学生の意見分布、心理学研究者間の差異、パーソナリティ研究, 12, 90-105.

本報告の調査は、文教大学大学院人間科学研究科人間科学専攻の2005年度開設科目「人間科学研法演習(丹治哲雄担当)」の一環として実施されたものである。

<要旨>

文教大学越谷キャンパスでは、主に学生・大学院生を研究対象として、学生・大学院生・教員らによる膨大な数の心理学研究が行われてきた。これらの研究は、研究の倫理基準に沿って実施されてきたのだろうか。学生・大学院生68名を対象に、大学キャンパス内での心理実験・調査実施の現状を予備的に調査した。彼らは学内の研究に協力的ではあったが、研究に参加協力することで幾つかの不快感を経験していることも明らかになった。大学キャンパス内での研究実施上の問題点等を論議した。
